Fantastic experience

倉敷中央病院　山本浩之

本研修に参加した理由は，世界最先端であるスタンフォード大学の医療・研究現場を体験し，見聞および交流を深めることによって自己のモチベーションアップと新たな道を模索することである．一週間の研修は，午前は講義，午後は Lab や病院見学，夜は Evening seminar と Discussion を主とした非常にタイトなスケジュールであるが，すべてに斬新なアイディアが盛り込まれており，時がたつのを忘れてしまうほどエキサイティングなものであった．Molecular Imaging を中心とした Moseley 教授のパワーとユーモアにあふれたプレゼンテーション，世界最先端の Lab 視察，米国の診療放射線技師の臨床現状，全国から集った優秀で素晴らしい仲間との出会い，異国での緊張感と英語に怯えながらも体感するすべてのことが新鮮かつ刺激的であり，自然とモチベーションも上がっていった．講義の中で最も印象に残ったのは Photon counting 技術を応用した CT 画像である．異なる 3 つのスペクトルを利用して膝関節の骨梁と靭帯，半月板を明瞭に描出しており，今後の CT 技術の未来を垣間見ることができた．

病院見学では，米国の診療放射線技師のテクニカルスキルがどれくらいのものか知ることはできなかったが，実際の臨床ではほとんど差はないと感じた．造影 CT に関しても体重あたりのヨード量を調整し，撮影プロトコルもわれわれとほぼ同等であった．米国はモダリティごとの専門技師，業務マニュアル化が明確であり，それぞれがプライドと自信をもって業務にあたっているように思われる．医療制度やライセンス制度の違いはあるが，“患者本位”である業務姿勢は世界共通である．米国の診療放射線技師は院内レクチャーやカンファレンスは行っているが，学術研究などは行っていないそうである．様々なモダリティを経験することが可能で，学術活動も比較的自由に行える点は，日本の診療放射線技師の大きなアドバンテイジであると言える．診療放射線技師の国際的視野を考えた場合，個々の価値観の違いが大きな要因となると思われるが，世界最先端の技術やエビデンスに関する情報を入手するために国際化は必要ではないだろうか．また，日本独自に発達しているものがあれば，それを世界に発信するべきではないだろうか．そのためには英語という壁を乗り越えなければならないが，医療レベルを上げるためにも情報共有は重要であると考える．いつしか JSRT が世界のエビデンス発信源となることを願う．

今回，海外研修初の男子ばかりの研修であったが，佐藤キャプテンの人力で最高のチームワークが結成された．8 期生という素晴らしい仲間に出会えたことは今後の私にとって大きな財産である．本研修での素晴らしい経験を活かして，今後も志高く，グローバル志向をもって臨床や研究，後輩指導に取り組んでいきたい．スタンフォード研修は今後の自らの進むべき道を教えてくれるかけがえのない研修である，この素晴らしい研修を多くの会員が経験できることを願っている．

最後に，このような素晴らしい海外研修の機会を与えていただいた日本放射線技術学会，スタンフォード大学，　GEHC-Jの皆様，スタンフォード大学留学中の松浦由佳様，8 期生を素晴らしいチームにまとめていただいた北里大学佐藤キャプテン，そして研修参加を快く承諾して頂いた本院諸兄に心より感謝申し上げます．

Lucas Center でのひととき
筆者前列右から 2 番目